

1. インプット仮説から言えること

インプット仮説(Krashen and Terrell, 1983)によれば、人は理想的なインプット(現在の習得レベルをほんのわずかに上回るインプット)を読んだり聞いて、それを理解することにより、言語習得が促進されるという。インプットとは、音声または文字による言語の入力のことである。つまり、理想的なインプットが多く与えられれば、それだけ習得も促進されることになる。教室で生徒同士がコミュニケーション活動を行うと、ちょうど習得レベルが接近した者同士なので、現在の習得レベルに近い言葉をやりとりすることになる。また、インプットに耳を傾けるためには、生徒にとって興味の持てる内容のインプットでなければならないが、クラスメートの発話は同年代の者ならではの共通関心事を含みやすく、それだけ関心をひきつけるインプットが得られる。

Krashen の提唱した仮説のうち幾つかはその後批判を受ける部分もあったが、インプットの重要性を指摘したこの仮説は今日も広く支持されている。

2. アウトプット仮説から言えること

言語を習得するためには、ただ単にインプットを理解しているだけでは不十分だということを指摘したのがアウトプット仮説(Swain, 1985, Gass, 1997, Pica, 1994)である。アウトプットとは、他者に対して音声または文字で言葉を発信することを意味する。受信のみでは育てられず、発信してはじめて育てられる領域として、アウトプット仮説は次の4つを指摘している：

- (1) 発信してはじめて、学習者は目標言語の構造と意味についての自分の仮説を実際に試すことができる。
- (2) 発信してはじめて、相手からフィードバックが得られ、それによって自分の仮説が正しかったかどうかを検証できる。
- (3) 発信の機会が多いほど、学習者は発話に熟達し、自動化できる。
- (4) 受信の際には学習者の注意力は意味に集中し、語順には関心が払われていない。したがって受信だけでは語順の能力は育たない。発話してはじめて学習者の注意が語順に向けられ、語順の能力が向上する。(Gass, S. M. (1997). *Input, Interaction, and the Second Language Learner*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, より)

コミュニケーション活動では、生徒が英語をアウトプットする機会が飛躍的に増加する。例えば生徒が1人1分ずつ話すためには、4人のグループ編成で会話を行えば4分ですむが、これをクラス40人の講義式授業で行った場合には、40分かかる計算になる。

3. インタラクション仮説から言えること

インタラクション仮説(Gass, 1997)によれば、学習者の言語能力を育てるには、インプットとアウトプットだけでは不十分であり、インタラクションが必要である。インタラクションとは、聞き手と話し手の相互の言語的やりとりのことである。相互のインタラクションの中で学習者は最も効果的に相手から理解可能なインプットを引き出し、相手に向かって自分の言語仮説を試し、それに対するフィードバックをもらい、それによって自分の言語仮説の正しさを検証・修正することができるからだ。こうしたインタラクションの中でも特に重要なのは、意味交渉(negotiation of meaning)だと言われる。意味交渉とは、互いの話をもっとよく理解するために、不明な語の意

味を質問したり、相手の理解を確認したり、うまく通じていない部分の意味を話し合っ解決する言語的やりとりのことである。 ” What do you mean by ---? ” , “ Do you understand? ” , “ Could you explain it in other words? ” , “ Do you mean ---? ” などは、代表的な意味交渉の表現である。

教室で生徒同士が少人数で話し合うコミュニケーション活動は、こうしたインタラクションを生み出すに適した機会を提供する。生徒同士なので遠慮することなく、自分の言語仮説に基づいて新しい文を作って相手に話しかけられる。また聞き手は遠慮なく相手の発言に対して意味交渉の質問を投げかけられる。

出典

Gass, S. M. (1997) *Input, Interaction, and the Second Language Learner*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Krashen, S. and T. D. Terrell. (1983) *The Natural Approach: language acquisition in the classroom*. Oxford: Pergamon Press.

Swain, M. (1995) ‘Three Functions of Output in Second Language Learning, in Guy Cook et al. (eds.) *Principle & Practice in Applied Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.